

第2講演会

6・4 講演会

案内

テーマ 今、問われる研究者としての成長
—— 院生時代に研究力量をどうつくるか ——

時： 6月4日（土）P.M. 1:00～4:00
所： 工学部8号館 208号（中央食堂2F）
講師： 鮎坂 真先生（関西大学教授 文学部哲学）
松柳 研一先生（京大助教授 理学部原子核）

6・4 講演会に関する京院協の5月11日付ビラでは、講演会の主旨と、内容、及び講師のプロフィールを紹介しました。今回のビラでは具体的な内容をより詳しく紹介したいと思います。松柳先生については、先生からいただいた講演内容に関する便りを、鶴坂先生については、氏の著作物と、昨年の益川先生の講演をかかわらせて有志による検討会を経て、京院協が論点として要請した中身についてあります報告しておきます。

松柳研一先生

『若手とは』

- §1. 自然科学の現代的性格
細分化と統合／自然の階層構造
いわゆる高度情報化社会について
- §2. 科学者に求められる見識
現代の核問題

§3. 大学院時代の課題 「成長」への多様な道

- §4. オバードクター問題の現実
我が研究室の周辺にみる
- §5. 若手とは、若手運動とは
高い目標をもつた研究者集団の形成を

松柳先生は、若手時代、集団的営為を通じて自らの研究上の位置づけをすること、研究上の自立にとって不可欠と考えられ、原子核三者という若手研究者の集団作りを中心的に担わめてこられました。講演では、どうした経験をもよんだ、集団形成のあり方や、自らの成長のプロセス等有意義な話がきけると思います。

鶴坂真先生 ～ 論点にかかる～

先生は、「現代の思想状況とマルクス」の中で、現代の哲学の二大潮流の一つとして、「矮小化された科学観に依拠している点で偽科学主義、あるいは悪しき科学主義と呼びうるもの」をあげてあります。その例として、新カント学派にみられる、「壮大な哲学体系を否定して、ただ認識論の研究のみに哲学を限定する」もの、「体系的世界觀の構築を断念し」、「『等身大』の思想がいい」と主張する竹内芳郎氏のような系列、実証主義的な特徴をもつが、本質や実体とか法則をさげ、「場あたり的アーティズム」や「改良主義的な行政技術論」を唱道するガール・オバードクターの系列等をあげておられます。ここであげられておられる現代哲学の特徴が、我々院生の最近の研究パターン、スタイルによく似ている点にはまず驚かせられます。その特徴とは、自らの研究、科学に限定性をつけること、すなわち、研究の領域や意味、課題を非常に狭く捉えようとする傾向であり、研

究の大ニフ化、悪しき専門化といわれるものに通じる傾向です。このような研究の傾向は、鶴坂氏にしたがえば、単に、傾向性や、規則性にすぎない法則ではなく、ものごとの発展の必然性を示唆する「発展法則」を明らかにすることにより、自然と社会を統一的理論的に解明する真の科学の使命にもとる、ものといわねばならぬでしょう。

このような傾向即研究者の一人一人は狭い分野の狭い課題にしか関わらないし、そこにはしか責任を負わず、またそこでの満足感とする傾向は、細分化された今日の科学の性質によって我々が容易には入り込んでしまう傾向でありましょう。若手にヒツアはさらにはその特殊状況、すなわち、「新しい分野に手をだせば上へニラまくる」、また昨今のようになり問題が厳しくなっている下で「業績をあげなければならぬり、かけのゆからぬるものに手を出すよりも、まずなんでもいいからまとめておけばならぬり」(昨年の益川講演)という状況を打開しない限りこの傾向はさらに助長されるといわなければならぬでしょう。

昨年の益川講演ではこうした傾向を抑えて若手の「保守性」と呼んでおりましたが、この「保守性」をのり越えて「学問を新しくしてゆく力」を發揮してゆくためには若手の運動が必要であり集団形成が必要であるとされました。

私達は、こうした傾向を克服してゆくために集団形成の必要な

ことを当然の前提としつつも、このような傾向を生み出す原因は何であり、それを克服する手立ては何かにつけて分析をすこめなくては必要があります。本講演会では、とりわけ、このような傾向が生み出される原因について、今日の科学の性格、現状の中で見出すこと、そしてまた、一方でこのような傾向を克服しうるような契機を科学そのものが内在しているのか、それはいかにして展望することが可能かということを追求したいと思っています。

なお以上のような問題については昨年の益川講演(『創意』12号収録)が示唆に富んでおり、講演会のたたきだいとしたいと思ひます。

